

北海道学！！

(赴任して、初めて知った 北海道)

- ① -30°C 冬の運転には氷雪対応スコッフ、スプレー不凍液、毛布等用意。② 日本一寒冷地は陸別(車のテストコースあり)。
- ③ 北海道人は過去形で言う。方言も結構多い。④ 北海道人は -30°C を単に 30°C と言う。⑤ -30°C から -15°C になったら暖かく感じる(エアコン暖房 20°C が暖かく感じるのと同じ)。
- ⑥ 極寒深夜に大音響が官舎に響く(金属の跳ねる音)。
- ⑦ 氷雪道の歩行には落下雪にも注意。傘はささい。
- ⑧ 官舎の凍結防止対策。缶ビールは破裂防止の為冷蔵庫に。凍結配管は直接電流通電解凍。
- ⑨ 毛蟹は春が最盛期。安いのでミソしか食べない。
- ⑩ 熊や鹿も食べた。ヒグマ親子に遭遇、恐怖の体験(退却策学ぶ)。
- ⑪ 冬季車の免許更新時に雪氷道の実地運転と鹿衝突退避策受講。
- ⑫ 冬の出張は飛行機次第。帰路もとんでもない空港に。
- ⑬ 車の衣替え。真夏でも一日の気温差が激しく年中ストーブ使用。
- ⑭ 春を告げるカッコウの鳴き声。バーベキューの季節到来。
- ⑮ 灯油は予備タンクに備蓄が必須。タンクローリーが自宅玄関まで。
- ⑯ 大量の鮭の遡上。海岸に捨て

られた大量の切腹雌鮭。⑰日の出は早く（早朝ゴルフ後に出勤）、遅い日没。⑱明治以来の国策：北海道は食料供給基地の位置付け。⑲南極越冬隊員として研究参加の機会あり（声かかるも断った）。

◎総括：北海道人口約550万人のうち約1／3が札幌に住んでいる。他の都市は高々数十万人である。道外から観光で北海道にやって来る人は、海産物を始め、食べ物は美味しく、夏もすがすがしくて素晴らしいと言う。冬は冬でスキーにスノーモービル、オホーツクでは流氷砕氷船のクルージング、北キツネや蝦夷鹿にも巡り会えて、春夏秋冬、北海道は素晴らしいと言う観光で来ると住むとでは大違いということが実感できたことは大きな収穫である。そんなにいいなら住んでみると言いたい。昔から住み慣れている人は別としても、歳を取ったら寒冷地・雪国での生活は本当にしんどいと思う。魅力的なソフト・ハード両面のインフラ構築等が、地方を過疎化させない高齢化・少子化社会の必須条件なのであろう（例えば：斎藤，東洋経済：高橋亀吉賞懸賞論文“情報革命と日本の将来”（1996-11-16））。

たった5年弱の短い期間ではあったが、この広大な北海道オホーツク圏の一地方都市（北見）の大学町

に生活して得たものは、着任早々-30℃の寒波の洗礼を受けたが、一生涯忘れることのできない貴重な思い出と財産になった。

★地方紙に1項から35項までの内容(南方系人間の極寒地孤軍奮闘記)を毎週掲載していたもの。ここでは19項までを紹介。